教えの庭から

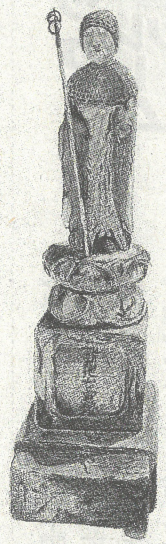
大社基地のむかし

出雲市斐川町・仁照寺住職　江角　弘道

出雲市斐川町出西にある大社航空基地は、新川廃川地跡に造られました。「航空基地以前にも重い歴史」があると黒田邦宏氏が本紙こだま欄（4月5日付）に書かれています。その歴史に仁照寺が関係していますので、紹介します。

仁照寺（当時は、神照禅寺と号す）は、斐川平野の出西地区神守のほぼ中央に建立されていました。しかるに、天保2（1831）年に松江藩は、常習的な斐伊川の洪水を防ぐために、斐伊川下流域の分流、開削に着手しました。立ち退きを迫られた耕作者は、約1千人、家屋は一説では75軒、寺院4軒、公共の蔵が13軒あったといわれています（「川の中の飛行場」槇原吉則・岡実智子編著）。寺院の中に仁照寺があり、移転をせざるを得なくなりました。

松江藩の命ですので拒むことはできず、当時の住職要峰和尚は、困惑したこと



挿絵　平尾恵郷

だと思います。移転先を決めるために、住職は、薬師如来像を背負い遠近の山野を逍遥しました。良い建立場所がなく思案して歩いていましたが、現在の小山（船子山）に来た時、薬師如来像が急に重くなってきました。住職は、不思議に思い薬師如来像を安置し、坐禅・読経すれば、『この地良し』の御霊験があり、松柏が生い茂っていたその地を整地して今日の寺院としました。

この新支流を造る工事は、出西地区剣先より荘原地区を経て宍道湖に至る幅が200メートル、長さが10キロに及ぶ開削と築堤を、わずか2年足らずで完成させました。工事は、困難を極め、毎日2千～3千人が工事に携わり、2年間で56万5千人もの人々が動員されました（前掲書）。

工事の途中で、寺にあった墓を掘り起こし、遺骨を放置したままにしていたので、その付近で夜な夜な亡霊が出没し地元民を困らせました。そこで松江藩に訴えて、供養料をもらい、天保3（1832）年に『新川地亡霊塔』を仁照寺境内に建立し供養をしたところ、亡霊は出なくなり、地元民は安堵をしました。この亡霊塔の台座の周囲には、塔建立の縁起が刻印されています。

縁起文の銘には「巨なるかな新川　田園忽ち穿つ　人家彼方に転じ　寺の本堂、ここに遷る　亡鬼野に迷い　荒神天に哭す　司官に訴えると　卿相憐れみを垂れる　地蔵の像を刻して　船子の嶺に設け　有漏を排除し　無縁を救済す　歓喜して供養す　倒懸を永く離れる　山門は沈静　家国は安全　仏法王法　吉祥萬年」とあります。

なお、明治に入り、神仏分離令によって、「神照寺」という寺号には神が入っているので、やむなく寺号を「仁照寺」と改めました。現在は、船子山仁照寺と号しています。

仁照寺境内には、防空壕がまだ残っています。終戦の年の7月28日に、米艦載機が大社基地を襲撃した時、赤子だった筆者は、そこに避難したと聞いています。小学生の頃（昭和30年ごろ）、大社基地跡を出西小学校への通学路や遊ぶ広場として、利用していました。その頃、自衛隊の飛行機が、離着陸をしていたのを覚えています。その後、家が建ったり、公園ができたりしました。さらに、葬祭会館ができたのも、お寺とのご縁かなと思います。